

平成16・17年度活動報告

ワークショップ

越境するポピュラー文化と＜想像のアジア＞

日時：2004年9月25日（土）

主催：国土舘大学アジア・日本研究センター

場所：国土舘大学中央図書館四階 AVホール

ディスカッション第一部

Brian Moeran：コペンハーゲンビジネススクール異文化コミュニケーション及び
マネージメント科教授

「Soft Sell, Hard Cash: アジアのJ カルトをマーケティングする」

今日、アニメからスシに至る日本のポピュラー文化（J-カルト）は世界の至るところで発見できる。とりわけ、植民地化された歴史があり、現在は先進国入りを目指しているアジア全域に広がっている。

文化を“Hard”（ファイナンスとテクノロジー）“Soft”（メディアと理想）に分けた上で、グローバル化との関わりにおいてJ-カルトの意味を理解するには、次の5つの流れを考慮すべきである。アジアに浸透する日本的な文化は、1）最新テクノロジーに依存している。2）地域的な資金投資の結果である。3）マーケティングやエンジニアリングなど様々な分野の人間を巻き込んでいる。4）ほとんどすべてのメディアを網羅している。5）日本のポピュラー文化における生産性などの理想を反映している。

J-カルト発展の要因としてまず挙げられるのは、日本の大企業が工場を海外に移転させたという経済的側面である。その影響によりアジアの人々の生活状態が改善され、娯楽に時間を費やせるようになると、日本の生活基準がアジアにおけるミドルクラスの理想となった。また、植民地時代を知る世代の多かった頃に比べ、日本文化が受け入れ易くなっている政治的現状も大きい。そしてアジアの国々にとって日本文化は近似性があり、親近感があるという文化的要素も挙げられる。そうした要因から、日本文化が基準となる“アジア・モダニティ”の発展が可能になったのである。

海外におけるJ-カルトはアメリカのポピュラー文化とは違い、“日本”を前面に主張しておらず、文化的に無臭である。つまり日本製品は、日本の生活の支柱としては捉えられていないのである。

この考えが示すのは、J-カルトが日本を出て行く際に特色を取り外し、各地域に入り込む際に、そのライフスタイルが好む色を身に付ける、受容的適応のパターンである。

J-カルトに拠るモノが、どのように使われているかだけでなく、どのように伝わり広がっていくか、ポピュラー文化における生産、流通、消費という全社会的なプロセスを、文化的かつ社会的なアプローチをもって分析をすることが必要になってくる。また、J-カルトの文化面のみに注目すると、営利的な面で矛盾が出てくる。ポピュラー文化がまず市場製品であることを考えると、文化面だけでの研究は受け容れがたいのだ。ポピュラー文化の流れを理解するには、メディア商品の中身と、その消費の側面を同時に研究することが必要である。

Sharon Kinsella：イェール大学社会学部助教授

「ギャングロ、文化の越境と友好」

コギャルは、90年代の中ごろよりギャルファッションと共に出現し始めた女子高校生のストリート・スタイルと結びつき、社会の中心的価値の対極を意味するようになった。そのファッションには、サーフスタイルやエスニック、娼婦のイメージなど多くの要素が取り込まれている。中でも汚いビーチサンダルや古い学生服をまとった格好はオギャル、真っ黒に見えるほど日焼けしたコギャルはギャングロと呼ばれた。ヤマンバとは銀髪に極端に白や茶色の化粧をしたギャングロである。

アメリカの黒人文化のエッセンスがコギャル文化に与えた影響は顕著に見られる。ニーナ・コルニュッツによると、ギャングロの黒い肌は、特に米国黒人に代表される自信とポジティブな自己イメージを意味しているという。80年代頃から台頭していたヒップホップ文化に始まり、Fineなどの雑誌やコギャル向けの雑誌ではナオミ・キャンベルやデスティニーズ・チャイルドなどが紹介されている。また90年代最大のアイドル安室奈美江はTLCなどのアメリカンソウルバンドの要素を取り入れている。これらに感化され、コギャルやギャングロ文化にはヒップホップの要素が多く、コギャルに人気のデパート109では、日本人向けに改良された黒人系（B系）と呼ばれる服が売られている。

男性週刊誌では、ギャングロは部族的なイメージを使って酷評されている。大沼ショージが1999年に発表した写真集『民族』などでは、コギャルをみすばらしいものとして取り扱っている。

コギャルやギャングロ達は意識していないであろうが、エスニックやブラックな要素が混在する格好は、日本のギャルスタイルが世界的な流行を取り込んでいることを表している。こういったスタイルは、ホミ・バーバの提唱した“想像の共同体が混在する超民族的・変形的感覚”への嗜好をあらわしているとも言えよう。複数の文化を混ぜ合わせたトランスナショナリズムの歴史は長く、1970年代のカンフー映画には既に黒人文化とのつながりが見られた。トランスナショナリズムはその時代にはあくまでサブカルチャー的だったが、最近になるにつれて、日本を始め他のアジア各国に広く浸透している。

社会的に最も抑圧され、枠に押し込められている集団が多民族的なスタイル形成の先端を担っている事実は面白い。理念に基づいて育成される日本の女子高校生、狭義のステレオタイプに押し込まれた米国黒人は、お互いの文化の域を越え合うことにより、個人としての広がりを見つけている。多民族的な文化は人種的、性別的アイデンティティの進化を反映しているのである。

ディスカッション第二部

張竜傑：慶南大学校日本語教育科助教授

「イデオロギーと脱イデオロギーの狭間から 韓国における日本大衆文化の昨日と明日」

韓国の日本文化開放当初、青少年が犠牲者になるという当惑感や、社会的な反響と意見の対立が続出した。2004年現在では、日本大衆文化を「受け入れる」よりはむしろ積極的に「楽しんでいる」ようである。

日本の大衆文化に触れるまでの国家的な背景を述べると、1960年以前、日本的な様相がなければ韓国語に翻訳しての輸入が可能であった。一般大衆は日本の文化と気づかず親しんでいたのである。それが文化の開放によって、暴力性や低俗性などの嫌悪感と、学ぶべき対象としての尊敬感が生まれた。しかし日本文化が入り込むにつれ、韓国人は作り上げてきたマイナスの先入観からの離脱が徐々に進み、現在では全面的に受け入れられている。大衆文化をイデオロギーと結びつけずに、文化産業の側面から考えるようになり、日本文化に対して客観的な姿勢が取れるようになったのである。

その最たるところがアニメである。現在韓国では24時間日本のアニメにアクセスできる。それを利用した副産物として、若者はパロディのアニメや小説、コスプレなどを作成しては楽しんでいる。その反面、教科書の歴史問題などでは日本に対する批判を強烈に行ったりする。

こういった行動から、国籍に関係なく個人的な趣向に重きを置き、良い物を評価する姿勢が伝わってくる。また、楽しみと政治的な思考とは分けて考えているということがわかる。つまり日本文化を受け入れるというのは、イデオロギーとはまったく関係がないところでの現象なのである。

以上のことから次の点を強調したい。まず、日本文化に対する韓国社会の意識が変わってきている点、次に、青少年の態度はイデオロギーや善悪に影響されず、個人の好みを反映しているものだという点である。これらの青少年の自由な態度はこれからの韓日関係に明るい未来を示唆していると言えよう。

土佐昌樹：国土舘大学21世紀アジア学部教授

「『韓流』はアジアの地平に向かって流れる」

90年代後半から韓国のドラマ、映画、歌などがアジア各地で大きな人気を呼び、「韓流」と呼ばれる現象を引き起こしている。韓流には主にドラマによって引き起こされるブームのレベルと、歌、映画、ファッションなどに対する若者世代の愛好がつくりだすサブカルチャーのレベルがある。ここではドラマに焦点を当てながら、日本とミャンマーの事例を比較することを通じ、韓流の共通性と偏差の意味を探る。

「韓流」の言葉が生まれた中国社会では、消費文化の加熱、多文化的メディア状況、海賊コピーという三つの特徴が目につくが、他の地域における韓流の社会的背景を考えるとときにもこのポイントは大きな手がかりとなる。

日本の韓国ドラマブームは、社会的ブームであるとともに、中年女性を中心にしたサブカルチャー現象であるといえる。『冬のソナタ』に対する熱狂的な人気の高まりは、戦後の日韓関係の発展線上にあるというよりは、一種の「飛躍」として記述できる現象である。メディアの多文化状況が進む豊かな日本のケースは、サブカルチャー現象が必ずしも若者世代に限られたものではないことを証明した。

一方、ミャンマーにおける韓国ドラマの人気は、家族的視聴が基礎となったブームであるとともに、若者を中心にした流行であり、豊かで新しい生活に対するあこがれがその推進力となっている。軍事政権下におけるコントロールされた多文化的状況、均衡を欠いた消費文化の加熱、海賊コピーのグローバル・ネットワークといった背景がそのブームを支えている。

両者は、異なる社会的主体を前提とし、一見すると異なる文化的方向を向いた現象である。しかし、もう少し慎重に検討してみると、そこには重要な共通性がある。それは、土着的親近感と流行的先端とのアマルガム、自由と統制が一定の割合で配合された文化的混淆が、「普遍的な」魅力を備えたテキストとして流通することである。「韓流」を通じて浮かび上がるのは固定したアイデンティティでなく、矛盾とダイナミックな多層性であり、それこそがアジアという夢幻的アイデンティティにほかならない。

民族主義が強く、文化的発信力が弱いと見られていた韓国からアジア広域に流通する文化的テキストが生み出されたことの意味は大きい。それは韓国文化のハイブリッド化と受容側のハイブリッド化が同時に進むことで初めて成立する現象であり、そうした「どっちつかず」の時空から明日の「アジア」の可能性と限界を読みとることができる。

ディスカッション第三部

青柳寛：国土舘大学21世紀アジア学部助教授

「琉ポップの越境が物語る沖縄性」

石垣島出身のバンドBEGINの歌う、琉球本来の自然美と人心の豊かさを訴え、それが失われていくことへの悲しさと危機感を促す「島人ぬ宝」は2002年にリリースされて以来、日本全土の興味を惹きつけている。これはNHKドラマ「ちゅらさん」などと同じ、日本の都会化された現実から離れ、ユートピア的イメージが濃く映されていると同時に、サブリミナルに沖縄人（うちなんちゅー）の消え行く沖縄文化に対する危機感が表されていると考えられる。

復帰30周年をきっかけにして沖縄の文化的価値は再認識され、本土からの500万人以上の観光客、また移住希望者を増加させた。加えて本土でも沖縄食レストランや雑貨が販売されるなど、沖縄発文化が賛美される現象がおきている。だがそういった興味は現地人の間では、環境や従来你的生活様式、人間関係などを崩しているという懸念を生んでいる。「島人ぬ宝」は全国の聴衆にノスタルジーを、沖縄人にはローカルアイデンティティを思い起こさせるよう作用しているのである。

これらのイメージに対し、それがどのように現地で使われ、どのように沖縄の若年層が自己のアイデンティティを見出していくかを調査するために、沖縄の家庭や交流の場であるゆんたくの場、そのなかでもあいやあしびなどといったところでエスノグラフィック・リサーチを行った。インフォーマントたちは沖縄の歴史についてそれほど詳しいわけではなく、基地問題についても特に異論はないという姿勢があった。けれども内地からの観光客の行為や無神経さに対する怒りを発端にして、そこからむしろ自分達のアイデンティティを強めると言う傾向が見られた。また他の沖縄の曲（MONGOL800の「あなたに」など）から、変わり行く沖縄を変わらせてはいけないというメッセージを受け取っている。こういったことから構築されるアイデンティティは「入り込んでくる内地」／「侵食される沖縄」という観念の上に成り立った漠然とした民族意識（より情緒的なムードである）と、やまとんちゅーと自分達の溝を認識した上で、そのやまとんちゅーが覆い被せたイメージをむしろ利用して自分達のアイデンティティを主張していくのだという新しい姿勢が見られる。

松岡環：アジア映画研究家

「映画が国境を越える時 アジアの“ハリウッド”が築いたムービーロード」

アジアにおける大衆文化の越境は今に始まったものではなく、植民地時代から、特にインド映画と中国語圏映画は流通していた。こういった流通、越境がどういう要因を以って可能になったのかを研究する。

中国語圏映画は1920年代、東南アジアへの輸出が始まり、中国人の移住と共に各言語系の華人、

華僑の地域に広がった。こういった海外市場で人気のあったものは、伝統劇の映画化が主であった。また現代劇のミュージカルや歌謡映画が主であり、流行歌が東アジア及び東南アジアに流布された。1960年前後に映画に北京語と英語の字幕が付けられ始めると、中国系の人々を巻き込みながら東南アジア全体で中国語圏映画がさらに広まり、1954年に始まった現在の「アジア・太平洋映画祭」から映画人の往来や合作映画などが頻繁に行われるようになる。そして1970年代の国際的ヒーロー、ブルース・リー、そして1980年代からのジャッキー・チェンがアメリカに進出したことは、中国語圏映画が更に越境する大きな機会になった。

次にインド映画であるが、1920年代からインド系住民の人々を中心に東南アジアに輸出が始まったが、その多くは多言語での制作であった。現在インドでは約二十数言語で映画が作られている。また伝統演劇を踏襲したミュージカル様式がトーキー映画と共に完成した。あらゆる娯楽要素の入ったインド映画は分かりやすく、イギリス領の時代を経て各国の映画人と交流し、資本を蓄えた。こういった国際化を経て映画産業は強化され、ビデオや衛星テレビの流通によって公開という手段に頼らなくても映画が広まるようになった。

これら両方の映画の越境に強く関与したものは、①国外在住の中国人やインド人の存在、②アクションやミュージカル中心の身体言語が主な媒体であったこと、③文化的均一性と共通性、異質性とエキゾチシズムの配合された文化思想、④音楽と映画などのメディアミックスであったこと、⑤ハリウッド映画などに比べて格安の経済性、が挙げられる。

また最近では、韓流ドラマを始めとして、テレビドラマ主導型の文化が流通している。台湾の「流星花園」は日本の「花より男子」という漫画を原作としているが、他のアジア圏の映画でも日本の影響が多く見られている。この状況は現在突如台頭したものではなく、日活アクションや円谷プロの時代から、日本とアジアはポップカルチャーの面で深く関わっているのである。

清水麗：国士舘大学21世紀アジア学部助教授

「スポーツ文化から見る台湾のポピュラーカルチャー」

国民的スポーツにまで発展した台湾の野球は、もともとは植民統治時代に日本から持ち込まれたものだ。台湾人は統治側の日本人よりも日本精神を体現し、日本に打ち勝つのだという意識が野球の広がる大きな要因であったように思われる。中華文化では、文に比べ武を軽視する傾向があるが、台湾では植民地時代の学校体操やラジオ体操などの国民教育から、スポーツ受容に対する体勢が整えられていたと考えられる。

国境や文化を越えてスポーツの広がる力は大きい。しかしその反面、容易にナショナリズムと結びつき、政治的に利用されやすいという側面もある。近代スポーツは体育活動を国民教育として施していく中で普及し、国民として均質な体を形成していった。それは、礼儀正しさの下に号令に対

してすばやく反応できる、上からの訓練に順応しやすい体と心である。その現象はオリンピックなどにおけるメディア放送でも顕著である。日本人選手の可能性に注目し、国旗を掲げる瞬間の感動を共有する。そこではスポーツ自体の楽しさよりも、そこに至るまでのプロセスや国民としての物語に焦点が当てられる傾向がある。

またスポーツは新しい遊びとしてかくれんぼや缶けりに取って代わり、日常化、定着化して受け入れられていった。ストリートダンスやバスケットボールの3 on 3に代表されるレジャーとしてのスポーツにおける遊びの要素の割合が、上からのナショナルな次元に取られて政治的に利用される度合いを変えていくと言えよう。それはスポーツ集団のベースをつくる基底集団が、政治や教育の世界を構成するベースの集団に深い部分でリンクしているからである。

日本では、1960年代の企業のレクリエーションだったスポーツサークルがチーム、セミプロ的に活動を拡大し、企業宣伝のための企業チームが形成された。また所属意識向上や一体感、そして健康維持のため、工場や企業の厚生施設としてスポーツ施設が作られた。その一方で、都会のライフスタイルとして平日は屋内フィットネスセンター、休日は郊外の公園で汗を流すなど、仕事とは別の趣味の共通性で結ばれるグループを生み出してきた。

この点において台湾では、家庭的な小企業が多く、日本のように企業によるスポーツ環境の整備は発展しなかった。また国民党政権が自発的な横のつながりを奨励しなかったこともあり、上からの組織化が大きく影響している。都市中間層のライフスタイルにおいても、運動不足や肥満、ストレスを解消するためにする散歩やジョギングなどが、台湾人の“参加する”スポーツの主流である。その多くが一人または少人数で楽しめるもので、日本人とは生活の中へのスポーツの取入れ方に大きな違いがある。2000年頃からスポーツ人口倍増計画が推進され、運動施設の充実が図られている。学校教育の中でも体育・スポーツに重点が置かれている。

スポーツ“観戦”は、CATVの開設もあり、急速に普及している。バスケットボールと野球が人気だが、特に野球はナショナルボールゲームと呼ばれ、台湾人は高い関心を持っている。その理由は野球が日本の植民統治時代に輸入され、それから発展開花してきた100年の歴史を、国と重ねて語れるスポーツだからである。特に1931年の嘉義農業高校や旧チームが日本甲子園に参加して優勝し、また1968年紅葉チームが少年野球で日本に勝つと、それが引き金となって野球ブームがおこった。以来台湾のメディアでは毎日のように、メジャーリーグ、日本と序列化された野球の結果が載る。

2008年の北京オリンピック開催に向けて、中国との政治的な問題を抱える台湾が、スポーツ意識向上やアイデンティティをどのように構築、編成していくのか。まだまだ課題は多い。そうした状況を政治的な視点だけでなく、ポピュラーカルチャーとしてのスポーツと視点として考察していくことが、台湾の実質的な変容を捉えていくために重要となっていくだろう。